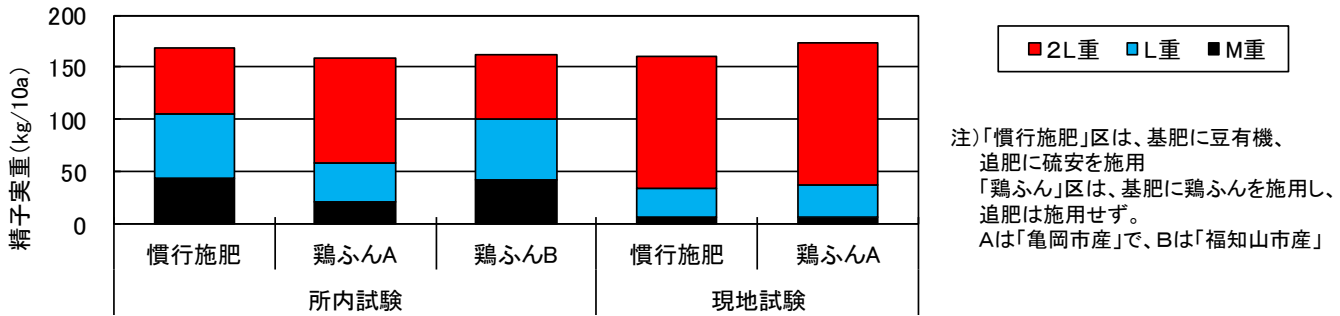


# 発酵鶏ふんを利用した黒大豆増収技術 (農林センター)

府内の発酵鶏ふんを利用し、「発酵鶏ふん全量基肥」と多収な「発酵鶏ふん+硫安追肥」の2つの施肥技術を確立しました。

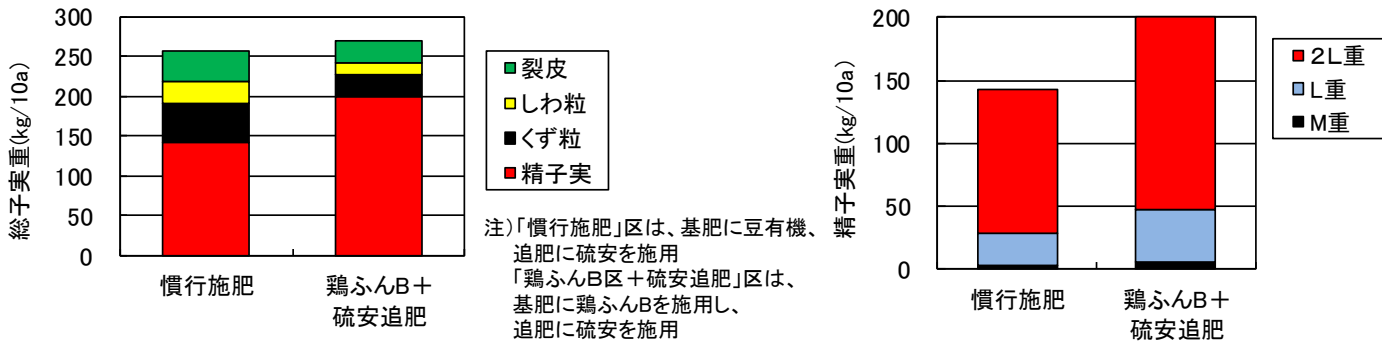
発酵鶏ふんによる全量基肥栽培を行った結果、収量は慣行施肥と同等でした。



注)「慣行施肥」区は、基肥に豆有機、追肥に硫安を施用  
「鶏ふん」区は、基肥に鶏ふんを施用し、追肥は施用せず。  
Aは「亀岡市産」で、Bは「福知山市産」

しかし、開花盛期の窒素の肥効が少なく、増収までは至りません。

そこで、基肥の発酵鶏ふんを減らして施用し、開花盛期に硫安を追肥すると、子実の肥大が良好となり、増収します。



硫安の追肥で、精子実割合が高まり、2L重が増えます。

- 発酵鶏ふんを窒素成分で4.7kg/10a全量基肥施用することで慣行施肥と同等の収量
- 発酵鶏ふんを窒素成分で3kg/10a基肥施用し、追肥として開花盛期に硫安を窒素成分1.2kg/10a施用することで、慣行施肥よりも多収
- どちらの施肥方法も、栽培前に牛ふん堆肥を1~2t/10a施用

- 発酵鶏ふんは安価なので、慣行施肥よりも肥料費を20~30%削減できます。
- 「畜産堆肥データベース」(畜産センター作成)の府内各地で生産される発酵鶏ふんの窒素成分量データから、施用量を決定できます。
- 地域の家畜ふん堆肥を活用する「地域資源循環型農業」を推進できます。